

「衣食足りて 礼節を知る」 社会を目指して

「欲求」以前に「必要」が満たされない人々

唐突ですが、あなたは今、何が欲しいでしょうか？そして何が要りますか？物ではなくて事柄でも構いません。たとえば私の場合、今晚友人と飲みにいきたいのですが、風邪が治っていないので真っすぐ帰宅する必要があります。このように欲求と必要は（同じこともあります）、違うことがしばしばです。ところが現代の経済学では、常に必要と欲求が同じであると仮定されています。あるいは欲求だけがあって、必要という概念の入る余地はありません。このことのどこが問題なのかを説明するために、少し個人的な昔話をさせてください。

山森 亮

Toru Yamamori

【研究テーマ】

福祉国家論

(ベーシックインカム・多文化主義)、

社会的存在論



大学受験に失敗したころ、路上での生活を余儀なくされていた人たちと出会いました。それで経済学を志したのですが、いざ大学に入って教科書を開いた時の違和感を今でも覚えています。「選好」「欲求」に基づく「選択」の話はあっても、貧困ゆえに「選択」することもできず、「必要」が満たされないという世界はほとんど出てこないではないかと失望し、授業に関心を持てない日々を過ごしました。アルバイトの傍ら、日雇い労働者や野宿労働者たちの運動に、ほんの一時期ですが、かかわるようになります。そのころ出会った仲間との議論や胸の内に抱えた思いが、私の研究の原点です。なぜ一生懸命働いている人たちが世間からは怠けものとみなされてしまうのか。なぜ困窮している人たちをソーシャルワーカーは追い返してしまうのか。なぜ多くの人が路上で冷たくなって人生を終えているのに、ニュースにもならないのか。どうしてそうした辛い出来事のあとに（当時通っていた）大学に戻ると、「日本に貧困はない」とかいう教授のご宣託を聞かなくてはならないのか。いったい自分には何ができるのか。

必要とは何かを問うクロスオーバー的学問

「欲求」と「必要」を区別しないのであれば、食べるものがなく明日を生きることもあきらめなくてはならない状況も、高いフランス料理を予算の都合であきらめるという状況も、理論的にはまったく一緒になってしまいます。この2つの状況を区別するためには、欲求が満たされないことと必要が満たされないこととは違う状況であると考え



なくてはならないはずです。こうした問いから出発して、以下のようないくつかのことを同時並行でやっています。

①「必要」を理論的に取り上げた数少ない現代の経済学者である、アマルティア・センの議論の肩に乗っかるような形で、修士論文や博士論文を書きました。彼の問題関心の広範さに導かれるように、平等論（*1）やポスト・コロニアリズム（*2）、あるいはフェミニスト経済学といった、通常、経済学ではマイナーな領域に足を突っ込んでいます。また日本においては経済学のみならず、哲学などほかの領域でも「必要」をめぐる議論はほとんどなされてこなかったようです。そんなこともあって、無謀にも学問の境界を越えることが多くなっています。たとえば「必要を決めるのは誰か」というような問いは、ひとり経済学だけで答えが出せる問題ではなく、哲学や政治学、カルチュラルスタディーズ（*3）などさまざまな領域とかわかってきます。

②これまで合わせて4年ほどケンブリッジ大学の研究員として、「社会的存在論」という方法論を学びながら、必要が経済学や思想の歴史の中でどのように取り扱われてきたかについて研究する機会に恵まれました。「経済学の父」アダム・スミスは、貧しい人々の必要が満たされる限りにおいて、市場社会は正当化されうると考えました。私はこ

*1【平等論】「平等とは何か」および「何の平等か」についての研究。

*2【ポスト・コロニアリズム】植民地支配・被支配が、現在の政治経済のあり方、そしてそれをとらえる学問のあり方に及ぼしている影響を考慮に入れようという思想潮流。

*3【カルチュラル・スタディーズ】政治経済や社会のあり方に、文化あるいは言説が及ぼしている影響を重視する、比較的新しい学問。

れを「アダム・スミスのただし書き」と呼びたいと思っていますが、このただし書きは今では忘却されてしまったようです。いつ経済学の歴史から「必要」が消えてしまったのか。ミステリーさながらに、なかなかスリリングです。

③「必要」を満たす制度・政策にかかわる「社会政策」が、学部での私のメインの担当科目です。また前任校では社会福祉学科で教員をしておりました。この領域での研究としては、ベーシック・インカム（基本所得）という、福祉国家の現在のあり方とは一見大きく違う考え方を中心に研究しています。現在の仕組みが「働かざる者食うべからず」（正確に言うとお金持ちは働かなくても食べられますから「働かざる貧乏人は食うべからず」ですが）という金言で説明されるとすれば、ベーシック・インカムは「衣食足りて礼節を知る」という金言に訴えかけます。市民として生活を営み責任を果たしていく出発点として、まずは食べられることを保証しようという発想です。つまり誰でも、生活に必要な最低限のおカネは無条件で給付されるようにしようという仕組みです。

実は福祉という発想が出てきたり、経済学という学問が出てきたりするのと同じだけの歴史を、この考え方も持っています。18世紀の終わりごろからです。数十年前には世界の各地で、社会運動の中で要求されていました。他方で「ネオリベラリズム」という言葉をつくった（市場にすべてを任せばよいという考え方の教祖と目されたりもする）経済学者も類似の主張をしていたりして、なかなか面白いです。